

日本語関係節諸相

木全睦子

0. 日本語で名詞を修飾する連体修飾成分が節の形をしたものには次のような例がある。

- (1) [その政治家が賄賂を受け取っていた] 事実が判明した。
- (2) [その政治家が賄賂を受け取った] 翌日に検察はそのことを知った。
- (3) [その政治家が受け取っていた] 賄賂は一千万円であった。

いずれも [] 中の部分が修飾節であり下線部が被修飾語である名詞（主名詞と呼ぶ）である。この中で(3)のように、修飾節が、その中に空所（と思われる）部分を持ち、そこに主名詞と同一の名詞あるいは名詞句を補って初めて完全な文の形になる、というものが関係節である。

- (4) [その政治家が（賄賂を）受け取っていた] 賄賂は一千万円であった。

英語の関係節については変形生成文法の枠組みで古くから多くの議論がなされてきた。日本語の関係節についても英語の分析によって得られた知見を活かして分析が進められてきたが、未だに決定的な見解には程遠い段階である。研究が進むにつれて、改めて日本語の連体修飾の複雑さ、ひいては日本語の複雑さについて認識を新たにさせられる側面が多々出てきている。

本稿は、日本語の関係節を英語と比較しながら、その（表層）構造、派生のプロセス、空所の統語的性質、の三点を中心にしてこれまでの議論をたどり、問題点を指摘すると共にこれからの研究の方向を探らうとするものである。

1. 日英関係節の違い

日本語の関係節を英語のそれと比べて、その主な相違点を指摘したものに Kuno (1973) がある。その相違点の幾つかをここで取り上げ、議論の手掛かりにしたい。

まず一見して明らかなことであるが、英語には *who*, *which* 等の関係代名詞があり、関係節の先頭部分（主名詞と関係節の間）に普通あらわれるが、日本語にはこの関係代名詞という形式は少なくとも目に見える形では存在しない。

(5) a. [私が今朝テレビで見た] ニュースは私には大きな衝撃だった。

b. The news [which I saw on TV this morning] was a big shock to me.⁽¹⁾

語順の違いも明らかである。英語関係節は主名詞の後ろに来るが、日本語では逆に前にあらわれる。このことは、よく知られているように、主要部パラミターの価が日本語と英語では逆であることの帰結、すなわち、英語は head-initial (主要部が補部の前に来る)、日本語は head-final (主要部が補部の後ろに来る) だからである⁽²⁾。

日本語の関係節中には、主名詞と同一のものをあらわす名詞句があったと考えられる場所に空所の代わりに代名詞があらわれることがある。英語ではこの現象は(標準英語では)見られず、英語の関係節には必ず空所が存在しなければならない。その結果、関係代名詞を除いた関係節は必ず不完全な文になる。

(6) a. $\left\{ \begin{array}{l} \text{その人} \\ \text{彼} \\ \text{そ} \end{array} \right\}$ の名前を忘れてしまった] お客

b. *the guest [that I have forgotten $\left\{ \begin{array}{l} \text{his name} \\ \text{the name of him/that person} \end{array} \right\}$]

c. the guest [that I have forgotten the name of \emptyset] (Kuno より)

(6c)で、*I have forgotten the name of* の部分だけでは統語的にも意味的にも完全な文ではない。*the guest* と同一指示の関係代名詞 *that* が \emptyset の位置に入って初めて関係節は完全な文になる⁽³⁾。(6a)では(6c)のように欠けた部分はなく、関係節はそのままで完全な文になっている。Kuno (1973) はこのことが日本語の関係節では要素の移動が行なわれていない証拠になると述べている。勿論(6a)でも代名詞の部分の空にした「私が \emptyset 名前を忘れてしまった」という関係節は可能であるが、その場合、格を示す助詞の「の」も落ちることに注意しておきたい。

次に、英語の関係節には制限節と非制限節があり表層で区別されているが、日本語ではその区別がない。

(7) a. [私が好きな] 田中さん (非制限的あるいは制限的)

b. Tanaka, [whom I like] (非制限節)

c. the Tanaka [that I like] (制限節)

しかし、日本語にも制限的、非制限的な用法の区別が存在することは(7a)が曖昧であることによっても明らかである。Kuno は、日本語では先行詞と関係節の間の意味関係によってのみ制限節か非制限節かが決定されると述べている。限定的な修飾語と非限定的な修飾語が日本人の意識の中で区別されているのはこの曖昧性からわかるが、関係節を使う場合に区別さ

れているかどうかについては疑問がない訳ではない。今このことを詳しく論じることはしないが、日本語の場合、関係節は第一に単なる修飾であって、限定の為のものではないのかもしれない。実際、日本語で関係節が使われるのは非制限用法が大変多いと言われている⁽⁴⁾。

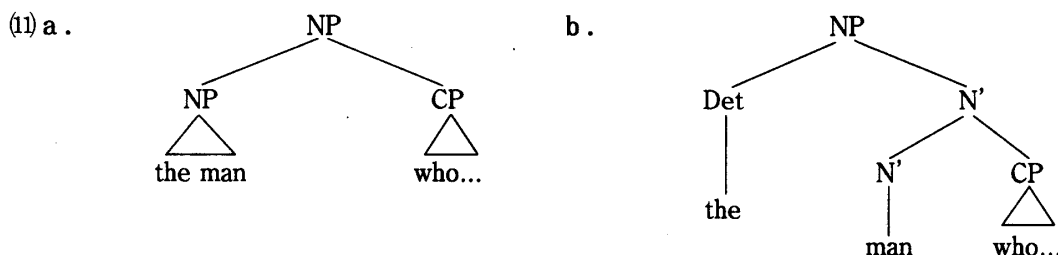
次に構造的な違いをあげてみると、英語の関係節では次に示すように主名詞となる名詞句に種々の統語的制限があるが、日本語ではその制限がかなり緩い、ということがある。

- (8) a. [死んだので家族の皆が悲しんだ] 犬
 b. *a dog which, because (it) died, everyone in the family was saddened
- (9) a. [[世話をしていた] 人が死んでしまった] その犬は家出した。
 b. *The dog which the person had been looking after died left home.
- (10) a. [[私が会うこと／の] が難しい] 人
 b. *the person whom that I see (him) is difficult

これらの英語の例が非文法的であるのは、Ross (1967) の要素の移動に関する一般条件に違反しているからだと考えられている。後の部分で再び取り上げるが、(6)で見たように英語の関係節では節中にあった関係詞が先頭部分に移動するというプロセスが仮定されているので、その際に移動の制約が適用されるのである。(8)は副詞節、(9)は関係節（複合名詞句）、(10)は主語節の中からの取りだしで、すべて、Chomsky (1986) の下接の条件に違反した取りだしである。日本語の関係節にこの制約が適用されないものがあるということは、(6)の例文と同様、日本語関係節の派生をどのようなプロセスとして分析したらよいかを考える上で重要な事実だといえる。

2. 日本語関係節の構造

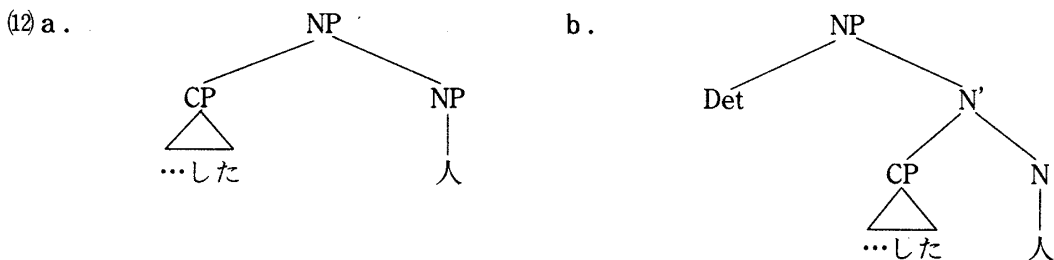
日本語の関係節の(表層)構造を考える前に、日本語と語順において鏡像関係にある英語の関係節がどのような構造を持つと考えられてきたかを見てみよう。(表記法は年代によって変化しているがChomsky (1986) のものに翻案して示すことにする。) 現在英語関係節の構造として仮定されているのは次の2種類であると言えよう。



この内最も広く受け入れられているのは(11a)の構造である。(Ross (1967), Chomsky (1986), その他多数)しかし、決定的な証拠があって定説になっている訳ではない。(11b)の構造をと

っているのは、Jackendoff (1977)⁽⁵⁾、McCawley (1988)、Ouhalla (1944) 等である。詳しい議論は省くが、McCawley (1988) は(11b)を英語の制限的關係節とする証拠として、N' 部分 (Det を除く主名詞部分と關係詞部分) が *one* による置き換えができ、また等位接続の際、一つの要素として振る舞うことを挙げている。また彼は、非制限的關係節は全く別な構造をとるともしている。

日本語の關係節も (11a) と対称的な (12a) が仮定されていることが多い。(Hasegawa (1985), Imai (1987) 他)



しかし日本語についても、McCawley と同じく、制限的關係節については (11b) と対称的な (12b) の構造をとり、非制限的關係節は別の構造をとる (実際は (11a) と対称になる (12a)) とする意見が少なからず見られる。(井上 (1976)⁽⁶⁾、神尾 (1983)、三原 (1992)) ここで神尾 (1983) と三原 (1992) を紹介し、日本語の關係節を英語と同じように WH 移動として説明するのが適当であるのかという議論への繋ぎとしたい。

神尾 (1983) によれば、名詞の代わりとして代名詞的に用いられる「の」の分布上の制約を考えると、日本語の制限的關係節は (12b) のように、關係節が主名詞の補部となる構造でなければならないとしている。その議論を少しだどってみよう。

- (13) a. 安い ステレオ があれば買おう。
 b. 安い の があれば買おう。
- (14) a. まずい すし を食べさせられるのはいやだ。
 b. まずい の を食べさせられるのはいやだ。
- (15) a. あの 変な奴。
 b. あの 変なの、だれだ。

(13)~(15) b の文の「の」はそれぞれの a の文の下線部の名詞の代わりとして用いられている。この「の」が現われる際に次の三点の制約がある。まず、「の」は単独では名詞句を形成できず、必ず修飾語句を必要とする。(cf. (16)) 次に、抽象名詞は「の」で置き代えることができない。(cf. (17)) 最後に、「の」に先行する修飾語句には特徴があり、指示詞、数量詞、「ある」「例の」等の語は容認されない。(cf. (18))

- (16) *の があれば買おう。

(17) 固い信念をもった人/*固いのをもった人

(18) a. 3本のビールを買ってきた。/*3本の(の)を買ってきた⁽⁷⁾。

b. ある男がそう言った。/*あるのがそう言った。

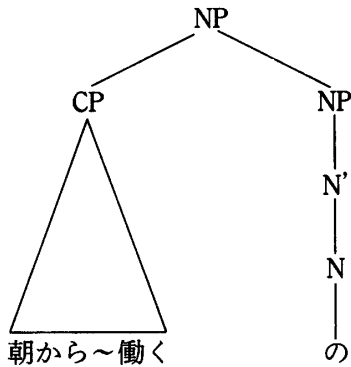
さて、関係節の主名詞も「の」で置き換えることができる。その場合、関係節は必ず制限的意味しか持たない。

(19) a. イギリス留学から帰ってきた吉田さん/イギリス留学から帰ってきたの

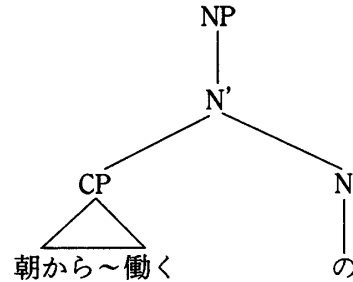
b. 朝から晩までよく働く日本人/朝から晩までよく働くの

もし(19a, b)が(12a)タイプの構造(20a)だとすると「の」は単独でNPを占めることになり、上述の第一の分布上の制約に反することになる。しかし、(12b)タイプの構造(20b)だと考えれば「の」は修飾語句として関係節を取っていることになり、分布の制限には抵触しない。

(20) a.



b.

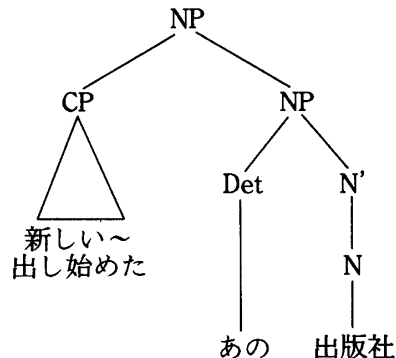


「の」での主名詞の置き換えは非制限的關係節の構造にも示唆をあたえてくれると神尾は言う。まず(19a, b)で、主名詞が名詞の場合、関係節は制限的、非制限的両方の読みがあり曖昧であるが、「の」になると曖昧さは消えて制限的な解釈のみしかなくなる。この事は非制限的關係節は「の」が生じうる(20b)の構造を持ってはいないことを示唆する。では非制限的關係節の構造はどう考えればよいのか。例えば次の例を見てみよう。

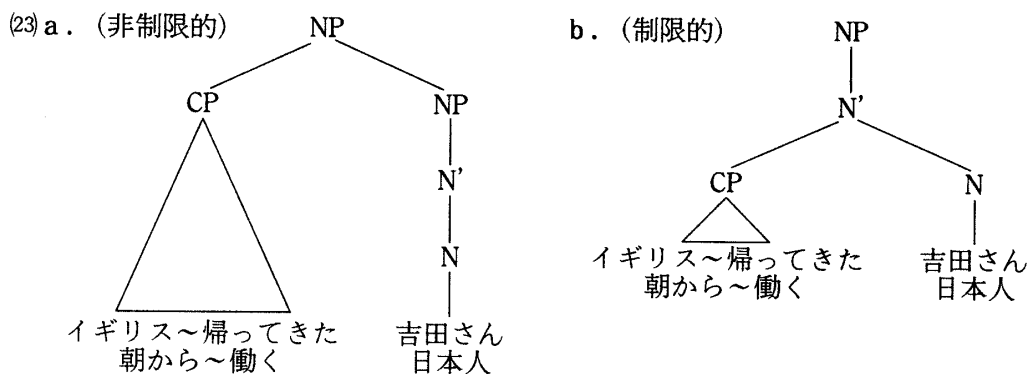
(21) 新しい文学全集を出し始めたあの出版社

(21)には非制限的な解釈しかない。ここでは主部が「あの」という決定辞をもつNPであることは明らかで、この構造は(12a)タイプの(22)と考えられる。

(21)



すなわち、非制限関係節は主部がNの主名詞のみではなくNP全体なのである。再び(19)で考えると、主名詞が「の」の場合は制限的な解釈しかないが、「吉田さん」「日本人」という名詞の場合は非制限的、制限的両方の解釈が成り立ち、それは(23a, b)の構造をそれぞれに与えることによって説明できる。



以上が神尾 (1993) の議論であるが、このように(23a, b)の構造をそれぞれの関係節に対して仮定することにより、関係節の解釈が決定辞の位置により制限的、非制限的どちらかに決定することを自然に説明することができる。(21)に対して同じような意味で(24)の語順の文がある。

(24) あの(,)新しい文学全集を出し始めた出版社

(24)では関係節の「新しい文学全集を出し始めた」は(21)と違い制限的な解釈しかない。また次の例のように日本語では限定詞の前後に関係節が可能で、前に来る関係節は必ず非制限的解釈を持ち、後に来るものは必ず制限的解釈を持つ。

(25) [花子の友達である] あの [ブーツを履いた] 女性

(26) [私達が病院で見かけた] 例の [言うことが少しおかしい] テレビタレント

このことは関係節が一応に(12a)の構造を持つと仮定したのでは説明できない。限定詞が関係節の前に来るのが出来るのは(12a)の構造においてしかあり得ず (DetはN'の“sister”である)、その場合の関係節は制限的なものであるとして始めて自然な説明が可能になる。

三原 (1992) では、この神尾 (1993) の議論に加えて、日本語関係節の時制が、コト節、同格節と並んで、彼が「視点の原理」⁽⁸⁾と呼ぶ原則に従って決定されることを示し、これらの証拠から日本語関係節がNPへの付加((12a)タイプの構造)ではなく、コト節、同格節と同様主名詞の補部((12b)タイプの構造)であると結論付けている。

3. 関係節の派生について

日本語関係節の派生については、生成文法理論の進展とともに色々なプロセスが考えられてきた。井上 (1976) ではその当時での標準的な考え方として、派生のプロセスを「主

名詞と同一の名詞句が（関係節中に）存在し、その名詞句が削除されるのである。」（井上（1976: 168））としている。井上自身は、日本語では関係節の中に代用名詞句が残ることがある事実も考慮に入れて、関係節の派生は、名詞句の特定化（Definitization）——代名詞化（Pronominalization）——同一表示のもとでの（義務的あるいは任意の）削除（Deletion under identity）——格助詞の削除（Particle deletion）というプロセスであるとしている。（詳しい議論は井上（1976）、井上（編）（1989）参照）

- (27) a. [太郎がニュースを取材してきた] ニュース
 ↓
 b. [太郎がそのニュースを取材してきた] ニュース
 ↓
 c. [太郎が \emptyset を取材してきた] ニュース
 ↓
 b. [太郎が \emptyset \emptyset 取材してきた] ニュース

Kuno (1973) では、関係節はもともと主題（NP+ハ）を含んだ文で、その派生は主題削除というプロセスである、と仮定している。

- (28) a. [その論文は [花子がその論文を読んだ]] 論文
 ↓
 b. [その論文は 花子が \emptyset 読んだ] 論文（同一名詞の義務的削除）
 ↓
 c. [\emptyset 花子が \emptyset 読んだ] 論文（主題の消去）

この仮定はその後成り立たないことがわかるが、その根拠となった、主題文とそれに対応する関係節の文法性が一致するという観察は、後の、関係節における主題制約という機能的制約へと発展する。

(29) The Thematic Constraint on Relative Clauses:

A relative clause must be a statement about its head noun. (Kuno 1976: 420)

英語では、関係節には必ず空所が存在し、また関係代名詞という目に見える形がその空所の統語的意味的特性をもって存在することから、関係節の派生は関係代名詞の移動というプロセス（Wh-movement）で説明されてきた。

(30) [_{NP} [_{NP} the book_i] [_{CP} which_i [_C [_{IP} John has written t_i]]]]]

(31) [_{NP} [_{NP} the book_i] [_{CP} O_i [_{IP} John has written t_i]]]]]

(30)で関係代名詞 *which* は演算子 (operator) とされ、それがもとの位置 (t の位置) から関係節の補文標識 Comp の位置へ移動し、そこで主名詞 *the book* と同一指標を付与される。この演算子によって束縛されることで wh 痕跡 t も同じ指標を持ち空所部分の解釈が完成する。関係代名詞が目に見える形で存在しない(31)の文においても同様に、目に見えない関係代名詞 (空演算子 (null operator)) が移動する、と考える。派生のプロセスに移動が関与していることで英語関係節では 1. で見たように要素の移動に関する一般的制約が適用されるが、それらの制約は関係代名詞が空の場合でも同じように適用されるので、空演算子の移動を確認

することができる。

- (32) a. The dog [which the person had been looking after *t*] died.
 b. The dog [the person had been looking after *t*] died.
- (33) a. *The dog [which the person [who had been looking after *t*] died]] left home.
 b. *The dog [the person [who had been looking after *t*] died]] left home.

日本語では目に見える形の関係代名詞が存在しない。そこで GB 理論の枠組みでは英語の (31)と同様に、空演算子を使う分析が行なわれてきた。

- (34) [NP[CP O_i [C [IP 花子が *t_i* 書いた]]] [NP 本_i]]

しかし移動分析の大きな問題点はこれも 1. で見たように、日本語の関係節には移動の制約が適用しない例が多いということである。ただし、全く制約がかからず自由だという訳ではない。例えば複合名詞句の例を挙げてみよう。

- (35) a. [その人が世話をしていた] 犬が死んでしまった。
 b. [[世話をしていた] 犬が死んでしまった] (その) 人
- (36) a. The dog [which the person had been looking after] died.
 b. *the person [who the dog [which had been looking after] died]
- (37) a. 強盗が [その人が世話をしていた] 犬を殺してしまった。
 b. ?強盗が [[世話をしていた] 犬を殺してしまった] (その) 人
- (38) a. The burglar killed the dog [which the person had been looking after].
 b. *the person [who the burglar killed the dog [which had been looking after]]
- (39) a. [その人が犬をあげた] 子供が死んでしまった。
 b. *[[その人があげた] 子供が死んでしまった] 犬
- (40) a. The child [who the person had given the dog to *t*] died.
 b. *the dog [which the child [the person had given *t* to] died]

(35a)では「その人」が関係節中の主語であり、その関係節自体が主文の主語(「犬」)に付いている。すなわち、主文の主語に付く関係節の主語である「その人」が(35b)では外へ出て主名詞となっている。ところが(37)では、主文の目的語に付く関係節の主語「その人」が外へ出ていて、容認度がかなり落ちる。(39)では、外へ出ているのは関係節中の目的語「犬」であり、これは許されない。対照的に英語では(36b), (38b), (40b)はすべて非文法的である。

このように日本語では、英語なら許されない類の関係節も許されることがあるが、それは、主名詞の格の種類に関係がある。Keenan & Comrie (1972) では、すべての言語に普遍的に見られるとされる、関係詞化が許される格の階層的順位を提案している。これは格に普遍的な順位をつけて、ある言語である格が関係詞化を許せばその言語においてはそれより上位の

格はすべて関係詞化が可能である、というものである。井上 (1976) ではこれを利用して、日本語における関係詞化可能な格の順位を、代用名詞があらわれる場合も考慮に入れて次のように設定している。

- (41) 主語>直接目的格>間接目的格>位置格「に」>位置格「を」>目標格「に」「へ」>位置格「で」>助格「で」>基準格「で」>奪格>所有格>起点格>随格>理由格>比較格 (井上 (1976: 187))

Hasegawa (1985), Imai (1987) ではこの格による違いを考慮に入れ、特に主格と目的格の違いに注目して空演算子による移動分析を行なっている。しかし、(35)のような明らかに移動の制約に違反しながら完全に文法的な例、また(6a)のように代用名詞句がある例では移動があるとは言えない。そうすると関係節中の空所である空範疇をどのように解釈するかが問題となる。(35)~(39)で見たように、また(41)からも推測できるように、日本語でも主語は問題なく関係詞化できるが目的語は難しい場合がある。これを説明する為に移動分析では主語位置の空範疇と目的語位置のものを分けて分析する。(39)を例にとると、目的語の空範疇は関係代名詞に相当する空演算子により束縛されるのですぐ上の節の主名詞 (子供) と同一指示になり、もう一つ上の主節の主名詞 (犬) とは同一指示になることができず解釈が得られなくなり(39)は排除される。主語の空範疇の扱いは人により少しずつ異なるが、目的語を変項 (空範疇の移動によって生じた wh 痕跡) とするのは同じである。Nakamura (1990) では主な分析による主語と目的語の空範疇の差を表にして次のようにあらわしている。

- (42) Different analyses of empty categories:⁽⁹⁾

	subject EC	object EC
a. Huang (1984)	pro/variable	variable
b. Hasegawa (1985)	PRO/variable	variable
c. Nakamura (1990)	PRO/pro	pro

Nakamura の分析は空演算子の移動を仮定していない。Nakamura (1990) が指摘しているように、空演算子による移動分析の根拠となる(39)の類のデータ (目的語の空範疇が主節の主名詞と同一指示が得られない文) には解釈に問題がある。それは、中島 (1987) が言うように、「日本語は関係代名詞がないため、能動と受動の区別が曖昧になる」(中島 (1987: 105)) ことがあり、従って主語と目的語も表層に現われていないと曖昧になってどちらとも取れるからである。次の例で見てみよう。

- (43) a. ジョン_iが [NP [s_{ei}/ e_i]試験に落した]人_j] を憎んでいる。

b. John_i hates the person who flunked (him_i).

c. John_i hates the person who (he_i) flunked.

(Nakamura(1990: 77))

空演算子移動による分析だと目的語位置の空範疇は空演算子の移動により常に関係節の主名詞によって束縛されるはずなので(43a)の解釈は(43b)しかない筈である。確かに(43b)の解釈が優先されるようであるが(43c)の解釈も問題なく成り立ち、(43a)はあいまいである。このような例を考えに入れて Nakamura (1990) では関係節中の空所は pro (音形を持たない代名詞) である (主語に関しては PRO の可能性も残しているが)、と結論づけている。

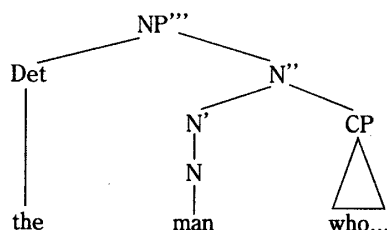
ここでは複合名詞句の制約について日本語関係節の振る舞いを見てきたが、(8)(10)にみられる副詞節からの関係詞化、主語節からの関係詞化においても日本語では英語で許されない多くの種類の関係節が可能であり、記述の一般化には逆行するが、日本語関係節は英語のような移動分析は無理があるのかもしれない。空範疇は pro と考える (Nakamura (1990), Mihara (1992) 等) pro 分析でも、pro と代用名詞句の相互関係、pro の認可条件の見直し等⁽¹⁰⁾、解決しなければならない問題も多い。日本語は勿論、英語でも、コンテキストを整えばこれまで非文法的とされてきた構造を持つ文が良くなる、という例も多く見つかっており、詳しくはふれなかったが、Kuno は(29)とともに(44)のような機能的制約によりそれらを説明できるとしている⁽¹¹⁾。

- (44) Kuno and Takami's Functional Constraint on Fronting: In a sentence that has a fronted element, the rest of the sentence must be a predication about the fronted element. (Kuno & Takami (1993))

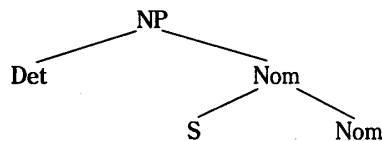
金田一 (1988) の言うように多分に「レトリカル」な言語である日本語では、英語にもまして構造的分析のみでは説明できない部分も多く、上述のような機能的側面からの分析がどのような知見をもたらすか、より詳細な議論が必要となろう。

注

- (1) 以下ことわりがない限り、例文の [] 部分は関係節を示す。
 (2) 英語の名詞句では、head を N と考えると、必ずしも常に head-initial であるとは言えず、(cf. a beautiful lady) その事が英語の名詞句の構造について色々議論を呼んでいる部分もあるが、節による修飾構造では本来の head-initial の語順を保っており、厳密な head-final の語順を持つ日本語とは語順において鏡像関係にある。
 (3) that は、正確には補文標識であるが、ここでは記述の簡潔さの為に関係代名詞としておく。
 (4) 寺村 (1980)
 (5) Jackendoff (1977) では NP は 3 層からなるとされているので(11) b とは少し異なり次のようになるが、基本的な形は同じである。



(6) 井上 (1976) では, Kajita (1968) の提案よりとして, 次のような形で出している。



(7) () に入ってる「の」は二つ並んだ「の」の一方が削除されていることをあらわす。

(8) 視点の原理 (tense perspective)

a. 主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時, 従属節時制形式は発話時視点によって決定される。

b. 主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時, 従属節時制形式は主節時視点によって決定される。 (三原 (1992: 22))

(9) ここには Imai (1987) の分析は入っていない。彼の分析でも object EC は variable であるが, subject EC は resumptive pronominal としている。

(10) Chomsky (1986) では, pro はイタリア語などの豊かな AGR をもつ言語にのみ存在すると規定されている。一方日本語は AGR を持たない, と考えられているので, そのままでは日本語に pro があると仮定することはできない。日本語での空範疇を pro と規定するためには Nakamura が試みているように pro の認可条件の改変が必要である。

(11) Kuno & Takami (1993) では次のような例を挙げている。

(i) a. *This is the child who John married a woman who was willing to adopt e.

b. This is the child who there is nobody who is willing to adopt e.

(ii) a. *This is the problem that I will ask Mary if I cannot solve e.

b. This is the person who I would be very disappointed if I couldn't meet e.

どの文も Ross の制約によって移動ができない構造で非文となるはずであるが, b の文は(4)に違反していないので良くなっている。

References

- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko. 1985. "On the so-called "zero pronouns" in Japanese." *The Linguistic Review* 4. 289-341.
- Imai, Takashi. 1987. "Some Consequences of Move-a and Japanese Grammar." In T. Imai and M. Saito (eds.), *Issues in Japanese Linguistics*. Foris.
- 井上和子 1976. 『変形文法と日本語〈上・下〉』大修館。
- (編) 1989. 『日本文法小事典』大修館。
- Jackendoff, Ray. 1977. *X' syntax: A study of phrase structure*. MIT Press.
- 神尾昭雄 1983. 「名詞句の構造」井上(編)『講座現代の言語(第一巻)日本語の基本構造』三省堂。
- Keenan, E. and B. Comrie. 1972. "Noun phrase accessibility and universal grammar." *Linguistic Inquiry*. 8. 63-99.
- 金田一晴彦 1988. 『日本語〈上・下〉』岩波書店。
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. MIT press.
- Kuno, S. and K. Takami. 1993. *Grammar and discourse principles: Functional syntax and GB theory*. The University of Chicago Press.
- McCawley, James D. 1988. *The syntactic phenomena of English*. The University of Chicago Press.
- 三原健一 1992. 『時制解釈と統語現象』くろしお出版。

中島文雄 1987. 『日本語の構造』岩波書店.

Nakamura, Masaru. 1990. "Japanese as a *pro* language." 『國弘哲弥教授還暦退官記念論文集 文法と意味の間』くろしお出版.

Ouhalla, Jamal. 1994. *Introducing Transformational Grammar*. Edward Arnold.

Ross, J. R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. PhD. Dissertation. MIT.

寺村秀夫 1980. 『名詞修飾部の比較』國弘哲弥（編）「日英語比較講座第2巻文法」大修館.